慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	科学と文学のはざま : 詩人ポンテュス・ド・ティヤール(1521-1605)の気象学
Sub Title	Entre science et littérature : la météorologie du poète Pontus de Tyard
Author	小池, 美穂(Koike, Miho)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2012
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.103, (2012. 12) ,p.166(97)- 181(82)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	川口順二教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01030001-0181

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

科学と文学のはざま
―詩人ポンテュス・ド・ティヤール(1521－1605)の気象学―

小池　美穂

1. はじめに

ポンテュス・ド・ティヤール（1521年－1605年）は著述家である前に、聖職者である。彼は、1578年に、故郷であるシャロン＝シュール＝ソーヌの司祭になる。

聖職者の傍ら、彼は詩人として1549年に『恋の彷徨（ほうこう）』の初版をリヨンにある大手出版社ジャン・ド・トュルヌ社から出版する。この詩集は、ペトラルカの文体と新プラトン主義者の主題を混ぜ合わせたもので、モリース・セーヴの影響を受けている。ティヤールは詩壇に新たな風を吹き込み、詩における一つのジャンルを作り上げたことが評価されている。

彼は哲学者としても活躍し、アンリー 3 世が創設した王室アカデミーのメンバーとして、王のために自然哲学の講義を行っている。1562年、ラテン語で書かれた天文学に関する書物 *Ephemerides octavæ sphæræ*『第八の天体位置推算表』を刊行する。天体暦、すなわち毎日の日の出、日沈、そして主要な星が天頂にたどり着く時間が記録されていて、ホロスコープを作成するための重要な資料となっている。ティヤールが単なるアマチュアの天文学者ではなかったことがこの書物から窺い知ることができる。

詩集の他に6冊の対話形式の作品を残している。この6冊は個別に刊行された後、1587年に『哲学論』という標題の下に 1 巻にまとめて出版され

る。特に今回取り上げる『穿鑿好きの対話その一』は、3人の登場人物、神学者であるイエロムニーム、哲学者である「穿鑿好き」、哲学者兼詩人である「隠者」の対話で構成され、哲学、神学の側面から宇宙の仕組みを解明したものである。ティヤールは無限概念、第8の天[1]、7つの惑星、そして四大元素について述べ、コペルニクスの説を紹介してはいるものの、プトレマイオスの天動説に基づいた世界を描き出している。この際、著者は古代からのさまざまな理論や思想を援用し、独自の世界観を編み出している。

特に四大元素の主題が長く描かれ、その中の一つの元素、空気で起こる「天気現象」に焦点を当てている箇所がある。気象学とはこの「天気現象」を対象とする学問で、その語源は古代ギリシャまでさかのぼり、空中に浮かんでいるものを研究対象とする学問という意味を表す。この言葉は、アリストテレスが紀元前3世紀ごろ書いた『気象学（*meteorologica* メテオロロジカ）』[2]のなかで用いられている。

アリストテレスの気象学[3]は理論中心であるが、その理論が時代と共に、少しずつ変化していく。この論文では、全ての現象を扱うのは困難なため、「風」という概念を例に挙げて語っていく。ギリシャからローマ、中世を経てルネサンスまで、一つの概念をパースペクティブに見ることで、知識というものがどのように変化していくのかを検証し、その過程で、「文学」と「科学」の関連性について述べる。ここでは、「科学」といっても現代のような意味をとるのではなく、人為的でないもの、つまり、人間を含まない自然現象に限定する。また、「文学」は、現代よりも広義に解釈され、人間に関する全ての事柄を指す。

2. 風の現象とその伝統

a. 古代ギリシャ：アリストテレスの場合

アリストテレスの気象理論で重要なものの一つに、太陽の熱によって生じる蒸発物がある。地とそれを囲んでいる水そして、地と水を覆っている空気が太陽の熱で温められると、二種類の蒸発物が生じる。一つは、煙の

ように乾いた熱いガス「煙状」、もう一つは湿った蒸気、つまり「霧状」である。

この乾いた熱いガスが、火と空気の間のあたりに上昇すると、そこに流れ星や銀河が発生する。今度は、湿った蒸気が上昇すると、空気と水の間のあたりに、雲や霧が発生し、それが凝縮すると、雨、露、雪、あられなどが発生する。その事をアリストテレスは以下のように説明する。

> 霧状と煙状との二種の蒸発物があるが、これら二つのものがその結果生じなければならない。その一方は大量の湿り気をいっそう多く含んでいる蒸発物であり、さきに言われたように雨水の始源である。また一方は乾いた蒸発物であって、すべての空気の流れ〔風〕の始源であり実体である[4]。

したがって、風は乾いて煙のようなものが大気の領域に入ると生じる。また、季節によってあるいは、場所によって、風が発生しやすい地域が存在する。南よりも北からよく風が吹き、アリストテレスの時代は、東の風が上から、西の風が下から、北風は左側から、南風は右側から吹く。このようにアリストテレスは風の性質を定義するものの、理論的な根拠を示すには至っていない。

b. 古代ローマ：セネカと大プリニウスの場合

少し時代が下って古代ローマの時代に入ると、風の描写の仕方が異なってくる。古代ローマの哲学者といえば、セネカ（紀元前1世紀）と大プリニウス（1世紀ごろ）が挙げられる。セネカは想像力と倫理性を、大プリニウスは文明論的な事柄を強調し、ありとあらゆる主題を扱った哲学者たちであるが、彼らも風の概念に興味を持ち、それぞれの見解を提示している。

セネカは、『自然研究』第五巻「風について」のなかで、下記のように述べている。

> ある時は大地そのものが空気の大きな力を吹き出す。しかも、大地はそれを地下の隠されたところから吹き出す。ある時は地表から大量の連続した蒸発が、すでに放たれていた蒸発物を上方へ追い立てたとき、混ざり合った蒸気のせめぎ合いそのものが風に変化する[5]。

ここでは、アリストテレスの二つの蒸発理論は具体的に説明されず、単なる「蒸発物」が上昇し、空気と混ざり、風が発生することを指摘するに過ぎない。このようにして、理論的な部分が簡略化されるのに対し、いくつかの挿話が長々と導入される。そのなかでも、身体と大地の照応関係を指摘している箇所がある。

> 我々の体内で食べ物によって膨張が生じるような仕方で（風は生じる）というのだ。この膨張は、必ず鼻孔への不快をともなって放出され、時には音をたてて、時にはもっとひそやかに腹を空にする。そのように、この大自然も食物を変化させるとき、気息（風）を放出する、[……]。我々にとって幸いなことに、自然は食物をいつでもすっかり消化する。さもなければ、我々はもっと汚い何かを恐れていただろう[6]。

風によるこの放屁の比喩は、あたかもアリストテレスを軽視したかのような発想で、理論的な風の概念が少しづつ崩されていくのが理解できる。つまり、難しい気象学の理論が少し、くだけた、日常的なレベルになってくる。

さらに、興味深いことに、本来自然哲学として捉えられる風の概念が道徳的な事柄に結びついてくる。たとえば、地下で発生する風の描写のあと、セネカはある話をテキスト内に埋め込む。それはマケドニア王ピリッポス（紀元前1世紀ごろ）の話である。彼の命令で、多くの人たちは、大量の松明を持って、長い間忘れ去られた鉱山に入っていく。長い道程に疲れた彼

らの目の前に突如、巨大な川と広大な湖が姿を現す[7]。

この話を読んだセネカは以下のように結論づける。昔の人もセネカの同世代の人も変わらず、人間というのは貪欲で、自らの足下にあるところまで利益を見つけ出そうということを指摘している。セネカの場合、風という現象を理論よりも日常レベルで理解し、自然の現象が人間の本質に関連づけられている。しかし、そのやり方はかなり強引で、風の現象を理論的に語った後、余談として倫理的な話を導入し、いわば説教をしているだけである。

セネカと同時代の博物学者である大プリニウスは、どのように風の概念を捉えているのか。彼は自らの書物『博物誌』の第2巻の42章のなかで、風の現象を以下のように記述している。

> わたしは雨や風がこれらとは違う原因によって起り得ることを否定しようとは思わない。大地が湿った霧を、またときには水蒸気のために煙った霧を吐き出すこと、そして雲は高いところへ昇る湿気または凝縮して湿気になった空気でできることは確かだ[8]。

大プリニウスは、風の概念を定義しているようで、定義していない。湿ったあるいは煙のような蒸気の存在と雲の現象を説明しているだけで、風と蒸気あるいは風と雲がどのように関連しているのかを読者には伝えていない。セネカと同様、アリストテレスの理論を簡略化した説明になっているが、風の概念に人為的な理由を挿入しているところが特徴的である。彼によると、風の発生にはさまざまな理由があり、そのなかでも「多くの家のなかでさえ、昼間は閉ざされ、湿った貯蔵庫が特殊な風を引き起こす」[9]のである。

ここでは、人間が作った「貯蔵庫」のなかで風が発生することで、以前までの風の概念の考え方である自然が自然を生み出す（つまり、地上から上昇する乾いた煙のようなものによって風が発生する）という法則が存在

しなくなる。人為的なものが自然を生み出す（つまり、人間が作った物によって風が発生する）という新たな法則が生まれる。

他方、セネカと同様に、「風の性質について」という章（46）で、人間の本質を語り始める。多くの戦や国の分裂にもかかわらず、古代ギリシャ人の学者が難解な研究に挑んできたことに大プリニウスは感銘を受けている。しかし、大プリニウスの時代では、平和も訪れ、物が豊富になり、喜ばしい出来事ばかりであるが、

> われわれは一切真新しいものを学ばない。未だに、古代人によって発見されたものを苦労して学んでいる。なんてことだ。良い生き方は古びるが、利益は古びない[10]。

航海術の発達でさえ、儲けるためだけで、知識を得るためではないことに大プリニウスは嘆いている。ここで、彼は同世代人の「欲望」を批判し、技術の発達も学問のためではなく、利益を得るためになされてきたとしている。セネカと同様、気象学という学問が道徳的な事柄に結びついているが、人間の普遍性（人間はどの時代も同じで変化しない）を語るセネカに対し、大プリニウスは知的なギリシャから実益のローマへ時代が変化することによって人間が愚かになっていくことを強調する。

c. 中世：シャルトル学派のコンシュ・ド・ギヨームの場合

中世に入り、風を再び理論的に捉えようとする例として、シャルトル学派のコンシュ・ド・ギヨーム（1090年頃－1154年頃）の『宇宙の哲学』（1125年－1130年）を挙げることができる。この書物は4巻でまとめられ、まさに題名の通り、天空、惑星そして空気中で起こる現象、大地そして最後に人間（特に身体と魂）を扱っている。風の現象は空気中に起こる現象の一つとして述べられている。

> 西側にある二つの逆流が一つは南へ、他方は北へ向かうものとして分

割されるとき、水の乖離において大気が動かされる。しかし、われわれに届くほどの大気が突き動かされたとすれば、ゼフュロスと呼ばれる風が生じる[11]。

ギヨームは、アリストテレスの蒸発理論による風の発生にはこだわらず、水と風の関連性を強調する。また、彼の指摘するところによると風は空洞のなかに入り込んだ大気が衝突することで生じるという。このようにして、知識は理論的に描写しているが、アリストテレスとは異なった箇所に重点を置き、セネカや大プリニウスのように一切文学的な側面に頼っていない。

3. ポンテュス・ド・ティヤールの風の概念

a. 風の定義

『穿鑿好きの対話その一』のなかに四大元素を扱った箇所があり、その空気の描写のところに風の現象が現れる。ここの部分は、アリストテレス派の哲学者「穿鑿好き」と、詩人であり哲学者でもある「隠者」との会話のなかで説明されている。

まず「穿鑿好き」は、空虚のなかで原子の集まりによって風が生じることを論じたデモクリトス（紀元前460－紀元前370ごろ）と太陽によって水蒸気を乾かしたものが風であると述べたメトロドロス（紀元前4世紀ごろ）の意見を取り上げてはいるが、むしろアリストテレス派の意見を重視している[12]。風は、冷たい性質の空気の中間点で起き、天空と太陽の熱によって引き寄せられ、燃焼しにくい乾燥した熱い蒸発物によって生じる。「穿鑿好き」によるこれらの風の定義は、16世紀では一種のトポスにしか過ぎず、ティヤール自身は、ジャック・ルフェーヴル・デタープルによるアリストテレスの『気象学』の注釈書に頼っている[13]。デタープルの場合、デモクリトスとメトロドロスの意見をセネカ、大プリニウスやアリストテレスの注釈者であるコクレウス(1479－1552)の見解をもとに論じ、自らの判断や見解を一切提示していない。ティヤールの場合、原典とは異なり、ど

の意見が最も適しているかを読者に伝えている。多様な意見が存在していることを強調するデタープルに対し、多様な意見のなかで最も正しい意見を提示するティヤールである。同じ知識でも利用目的が異なるのである。

その定義の後に、ティヤールは彼の知の有り方を反映させて医学・建築・占星術そして航海術の知識から得た独自の風の概念を作り出している。

b. 医学と占星術

このころ医学が脚光を浴びていたためか、ティヤールはこの学問を取り上げている[14]。伝統を重んじる保守的な医者のように、「穿鑿好き」は、ヒポクラテス（紀元前1世紀ごろ）、大プリニウス、ガレノス（1世紀ごろ）の意見に頼り、人体に悪いあるいは良い影響を与える風を記述する。大プリニウスに倣って、「穿鑿好き」は次のように主張する。地上から生じる蒸発物が空気中で風を形成するが、これを吸ってしまった人間は「神経をやられ、精神が不安定になり、徐々に衰弱し、肺を侵される」[15]のである。また、ヒポクラテスによると、北風が発生すると、脳にとって「悪いものやあまりにも湿ったもの」[16]全てを排泄物という形で投棄することができ、その病人は回復する。北西の風は咳を引き起こすが、北の風はそれを治す。

大プリニウスとヒポクラテスの意見の間にもう一人の人物である「隠者」が口をはさみ、「穿鑿好き」の長い独白を中断する。「隠者」は、占星術の観点を導入する。

> つまり、占星術者は五つの惑星と二つの光［＝月と太陽］の力をここで関連づけることを忘れなかった。その各々［＝惑星と光］を、なんらかの風と照応させた。しかしながら、その照応はこじつけで決定的なものではなく、学問というより、単なる臆見に留まっている[17]。

ティヤールの場合、この風と惑星の照応関係は、スペイン人の地理学者ペドロ・デ・メディッナ（1493－1567）の『航海術』[18]を参照している。こ

の書物の第三巻、二章のなかで、風の動きに関して述べているところに占星術を適用している。

> 占星術者の説によると、いくつかの星が風を動かす。たとえば、木星が北風を、太陽が西風を刺激する。それは、各々の原因がそれぞれの仕方で、どのように結果を導き出すのかという疑問の始まりに等しい[19]。

しかし、このスペイン人学者の考えは「隠者」にとって信憑性に欠けるものとなっている。

c. 建築

さらに、「穿鑿好き」は大プリニウスと同様、風の発生に、人為的な理由も付け加え、建築家であるヴィトルヴィウスを引用している。

> 研究熱心なヴィトルヴィウスは、ミティリーニ、確かレスボス島にあるメテリンのことであるが、そこにある家々の作りがすばらしいと褒めている。とはいえ、あまりにも戸と窓の配置が悪いがため、南風が吹き出し、大部分の住民が病気になると苦言を呈していた[20]。

ここの箇所は、ティヤールがヴィトルヴィウスの仏訳を参照したと推測されている。ジャン・マルタンの翻訳『建築あるいは、うまく建てる技』（*Architecture ou Art de bien bastir,* 1547 年）の中の特に 8 章目の「外壁に囲まれた内壁の分け方、そして風の悪い向きを避けるための内壁の建て方」[21]を読んだとされている。ヴィトルヴィウスの箇所は、本来実践的な家の作りに関する知識である。『穿鑿好きの対話その一』のなかで、その知識は人間が自然を抑制することができることを強調するために引用されている。「穿鑿好き」は、家の建て方によって、風の害を回避する人間の器用さを示し、風の描写を締めくくっている。

d. 風習

人為的による風の発生に対し、日常レベルの段階へと話が進んでいく。登場人物である「隠者」によると、いくつかの民族では、風の向きによって家畜を殖やす教えが存在する。

> したがって、昔は、いくつかの民族はそれら［風］を好み、そして、羊の群れを助けようと、それらに祈願していた。というのも、彼らは、羊の数を増やしたいとき、北風に訴えかけ、その風の向かい側に、雄羊を向けると、その雄羊は雌羊と交尾する。そして、雌羊の数を増やしたいとき、彼らは南風にも同じようなことをしていた[22]。

あるいは、

> 雄羊が雌羊と交尾する際、北風が吹くと、雄羊が生まれる。反対に、南風が吹くと、雌羊になる[23]。

このような言い伝えは、ルネサンス時代に流布したものの、実は伝統的に風習として残っていたことは確かである。ティヤールはアリストテレスの『気象学』ではなく、もう一つのアリストテレスの書物である『動物誌』と大プリニウス『博物誌』の箇所を援用している[24]。ここでは、風の概念は、ただ空に起きる現象だけではなく、生体への影響までをも示す。すなわち、風をうまく利用することによって、生活の改善方法を読者に提示している。

e. 風の方向とその多様な解釈

ティヤールのなかには、日常レベルとは少し離れ、理論的な部分が見え隠れしている。コロンブスの発見以来、航海術はルネサンス的な主題となる。それに伴い、風の概念も徐々に変化していく。特に、風の方向を指す図、あるいは羅針盤のコンパスカードが発展する。この風の方向図の理

論は、14世紀ごろの医者であるエヴラール・ド・コンティー（Evrard de Conty）によって確立される。船乗り、哲学者そして一般人の捉え方に立脚し、三つの異なった風の方向図を完成させ、船乗りにとっては、風の種類は16個、哲学者にとっては12個、一般人にとっては8個存在する。さらに、風向きの種類の数も異なっている。南は本来、下に向いているが、上に位置する場合もあれば、古代人の風の方向図を見ると南が右にあり、ポルトラノ海図[25]では下にある[26]。ティヤールも『穿鑿好きの対話その一』のなかで、風向きの種類に言及している。詩人にとっては4種類、地理学者は16種類、航海士にとっては32種類ある。

> 彼ら［＝航海士と地理学者］は［……］、世界の四つの部分に対応する主要な四つの風を構成した。それらの四つの風は、詩人たちによって以下のように名づけられた。東風をユーラス、西風をゼフィロス、北風をボレアス、南風をアウスターと。しかし、地理学者は、三つの東風、三つの西風、三つの北風を配置した。風の数は、十六まで増大する。そして、ついには、航海士が風を使いこなした体験と海難の経験によって、彼らの技術を向上させ、三十二の風を見分けるに至った[27]。

この考え方は、先ほどみてきた航海術の専門家であるペドロ・デ・メディッナの影響が強いとされている[28]。しかし、ペドロ・デ・メディッナとティヤールには大きな違いが一つあり、それは、ティヤールの書物には、挿絵が存在しないことである。例えば、登場人物である「穿鑿好き」は北が上にあるか下にあるか、方向自体を述べず、ただ風の名前とその数を述べるに留まっている。ティヤールの書物のなかでは、風の方向図は書物のなかの知識にしか過ぎず、実践を目的とするものではないということが分かる。

4. 結論

風の概念は、古代ギリシャでは純粋に理論的で難しいものだったのが、

古代ローマになると理論が文学的側面と混ざり合い、さらに中世に入ると古代ギリシャとは異なった形の理論となる。そして、ルネサンスに入ると、理論的な風の現象と他の領域の学問が融合する。

ティヤールの独創的なところは、風の概念自体ではなく、その組み立て方にある。風の概念を作る際、大プリニウスやヒポクラテス、建築家のヴィトルヴィウス、あるいは、地理学者のペドロ・デ・メディッナの意見に頼るのは、ティヤール独自の選択である。このティヤールの選択は時代を反映したもので、特に医学・建築・航海術の発達を背景としている。これらの発展と共に、風の概念の捉え方が変化していき、自然がどうあるべきかということを考えるよりも、そのなかにいる人間がどう対処すべきかということを考えている点で単なる自然現象を理論的に語るだけではなく、人間のあり方を述べている。

さらに、さまざまな領域と結びついているティヤールの風の概念は、百科全書的な側面を持つ。この百科全書的な性質はありとあらゆる知識が印刷術と共に流布し始めた結果でもある。しかし、あまりにも知識が豊富なため、どれが真実なのか、どれが真実ではないのかが判断しづらくなっていた時代でもある。情報過多な昨今の状況のなかで、ルネサンス時代に生きたティヤールを勉強することは、何らかのヒントになるのではないかと思っている。

註

1　プトレマイオスの天動説の世界は基本的に八つの層になった同心円の形をとり、四大元素の円の上に七つの惑星が存在し、その上に第八の天がある。

2　『気象学』は四巻に分冊され、一巻では、蒸発の理論、彗星と銀河そして、水と大陸の形成を、第二巻では、海、風、地震、稲光、雷鳴の現象を、第三巻では、特に虹の現象に焦点をあて、そして最後の巻では、自然現象や化学的現象、つまり、腐敗、沸騰、固体化、液状化などを扱っている。

3　気象学は、アリストテレスの宇宙論とも密接に関わっている。アリスト

テレスの宇宙の概念は、天空の世界と元素の世界とにわかれている。中心にまず地球があり、その周りに7つの惑星（月と太陽を含む）がある。さらに、その上に星が存在する。地球のなかには四大元素（火・空気・水・地）が含まれている。古代ギリシャの時代、風の実体と雨の実体を同じように考える一元素派とアリストテレスのような四元素派（第5元素エーテルを除く）とにわかれ、風や雨がどのような実体からできているのかを探究している。

4　アリストテレス、『アリストテレス全集5』（泉治典・村治能就訳）、岩波書店、1969年、第4章、71頁（仏語とギリシャ語の対訳を参照したい場合、Cf. Aristote, *Météorologiques Livres I et II*, (traduction de Pierre Louis), Paris, Les Belles Lettres, 2002, p. 71.

5　セネカ、『セネカ哲学書全集3』（土屋睦廣訳）、岩波書店、2005年、231頁

6　同上、232頁

7　同上、244頁

8　大プリニウス、『プリニウスの博物誌』第一巻、（中野定雄・中野里美・中野美代訳）雄山閣出版社、1987年、98頁

9　« Dans beaucoup de maisons même, des resserres humides, fermées au jour, ont leurs souffles particuliers » dans Pline l'Ancien, *Histoire Naturelle, livre II*, (texte établi, traduit et commenté par Jean Beaujeu), Paris, Les Belles Lettres, 1950, p. 51.

10　« On apprend rien de nouveau, a grand peine encor apprend on les choses inventees par les anciens. ...Mais quoy ? la bonne facon de vivre est envieillie, & non pas les profits ». Pline, *Histoire Naturelle II*, (traduction de Louis Mégret), Paris, Chrestien Wechel, 1552, chapitre 46, f. 43 r°.

11　『中世思想原典集成』第8巻、上智大学中世思想研究所編訳・監修、平凡社、1998-2002、p. 359.

12　« Democrite disoit le vent proceder de plusieurs Atomes assemblez en un vuide : et Metrodore, suyvi de quelques Stoïques, d'une exhalation aqueuse, deseichee par le Soleil. Toutefois les Aristoteliques de plus recevable opinion, en ont donné autre raison : logeant la generation des vents au rang des exhalations chaudes, seiches, et difficiles à enflammer, attirees par la chaleur solaire et celeste, jusques à la moyenne region de l'Air,...», dans Pontus de Tyard, *Deux Discours de la nature du monde, et de ses parties. A sçavoir, le Premier Curieux, traittant des choses materielles : et le second Curieux, des intellectuelles*, Paris, Mamert Patisson, 1578, f. 56 v°.

13　Aristote, *Meteorologia Aristotelis, Eleganti[...]*, Nuremberg, Friedrich

Peypuss, 1512, ff. L4 r° - L4 v° .

14　特にティヤールの時代では、医学が法律と同様に最も権威のあるもので、1530年代から、ガレノスとヒポクラテスの原典の刊行やそれらをフランス語に翻訳した書物が増え続ける。フランソワ一世の統治期間中から、コレージュ・ロワイヤール（のちのコレージュ・ド・フランス）で教授職が二席も医学部に与えられ、学問の中で重要な位置を占めていたことがわかる。Cf. François Lebrun et al., *Histoire générale de l'enseignement et de l'éducation en France*. *Tome II, De Gutenberg aux Lumières*, Paris, Nouvelle Librairie de France, 1981, p. 202.

　また、16世紀に入ると、医学という学問は複雑になり、3つの傾向に分離しつつあった。一方では古代医学（特にガレノスやヒポクラテス）を重んじ、他方では、実践を優先し、技術の進歩と共に古代医学や大学の医学教育に反対する傾向があった。また、ジャンバティスタ・ダ・モンテ（1498 - 1552年、イタリア人医師、パドバ大学で医学を担当）のように、理論と実践の両方を用いる傾向もあった。Cf. Ian Maclean, *Le monde et les hommes selon les médecins de la Renaissance*, Paris, CNRS Editions, 2006, p. 15.

15　Pontus de Tyard, *Deux Discours*, 1578, éd. cit., f. 57 v° .

16　*Ibid*. f. 57 v° .

17　« Les astrologues, dy-je, n'ont oublie de mesler par icy la vertu des cinq planettes & des deux lumieres, a chacune desquelles ils font advouer quelque vent ; toutefois avec difficulte non decidee, & laissee plus en opinion qu'en science », *Ibid*. f. 57 v° .

18　Pedro de Medina, *L'Art de naviguer de maistre Pierre de Medine, Espaignol : contenant toutes les reigles, secrets, & enseignemens necessaires, à la bonne navigation, [...]*, Lyon, Guillaume Rouillé, 1554. ティヤールの図書目録によると、彼はこの書物の1569年版（第二版）を持っていたことが明らかである。しかし、ジャン・セアール氏によると、『宇宙論』（のちの『穿鑿好きの対話その一』）の初版ではすでにメディッナの痕跡が、風の方向図の概念に見られる。おそらく、メディッナの1554年版を用いた可能性が高い。Cf. Pontus de Tyard, *Œuvres complètes Tome IV, 1, Le Premier Curieux*, éd. Jean Céard, Paris, Editions classiques Garnier, 2010, p. 39.

19　« [...]Selon la doctrine des Astrologues, qu'il y a aucunes estoilles qui meuvent le vent, comme Jupiter, qui excite vens, Septentrionaux : le Soleil, vens Occidentaux : qui est quasi un commencement comment chacune cause induit a un effet par sa maniere », Pedro de Medina, *L'Art de naviguer de maistre Pierre de Medine, Espaignol*, 1554, éd. cit., f. 23 r° .

20 « Le diligent Vitruve louant la magnifique structure des maisons de Mitylene, c'est croy-je Metelin, en l'isle de Lesbos, blasme toutefois l'imprudente disposition des portes & fenestres si mal tournees, que le vent austral regnant, la plus grand part des habitans tomboit en maladie[...] », Pontus de Tyard, *Deux Discours*, 1578, éd. cit., f. 58 r° .

21 « Or seront elles [les murailles] proprement ordonnees, si les vents sont par bon advis & prudence destournez des voyes & chemins publiques, pource que s'ilz sont froidz, ilz blessent. S'ilz sont chault, ils corrompent : & s' ilz sont humides, ilz nuysent grandement. A ceste cause semble qu'il est bien raisonnable d'éviter ces inconveniens, & qu'il fault prendre garde a ne suyvre ce que l'on fait coustumierement en plusieurs villes, par especial come a Mitylene, que est magnifiquement et en grande sumptuosité bastie en l'isle de Lesbos, mais inconsiderement situee : car quand le vent Auster y souffle, les habitants en sont malades quand c'est Corus, ilz toussent : & quand c'est le Septentrion, ilz retournent en convalescence, & neanmoins ilz ne sauroient demourer ny aux rues, ny aux places communes, a cause de la grande impétuosité du froid », dans Vitruve, *Architecture ou Art de bien bastir, de Marc Vitruve Pollion autheur Romain antique, mis en latin en françoys, par Ian Martin*, Paris, Jacques Gazeau, 1547, Chapitre VIII, f. 10 v° .

22 « Aussi certains peuples les adoroyent anciennement, et les invoquoyent en aide à leur mesnage. Car ils desiroyent d'avoir grand nombre de moutons, ils s'adressoyent à Boreas, contre lequel ils tournoyent le Belier s'accouplant avecques la Brebis : et faisoyent le mesme du costé d'Auster meridional, quand ils vouloyent leurs bergeries s'accroistre en nombre en brebis ». Pontus de Tyard, *Deux Discours*, 1578, éd. cit., f. 58 r° .

23 « Si la Bize vente lors que les Beliers se joignent aux Brebis, ils engendreront des masles : au contraire que ce seront femelles, si alors il fait vent de Midy ». *Ibid*., f. 58 r° .

24 ティヤールが読んだとされる原典について、下記を参照。Pontus de Tyard, *Œuvres complètes Tome IV[...]*éd. Jean Céard, *op. cit*., p. 247. 註405 « Aristote, *De historia animalium*, 6, 19, 574a ». 註406 « Pline, *Historia Naturalis*, 8, 47, 189段落目 ».

25 これは港がある場所を示す海図、沿岸の状況を描いた地図である。

26 Joëlle Ducos, *La météorologie en français au Moyen Age (XIIIe-XIVe siècles)*, Paris, Honoré Champion, 1998, p. 339.

27 « Ils...ne croyoyent qu'un vent, en constituent quatre premiers selon les quatre parts du monde, nommez par les poetes, d'orient, Eurus ; d'occident,

Zephyre ; de septentrion, Boreas ; & de midy, Auster. Mais les geographes en disposent...trois orientaux, trois meridionaux, & trois septentrionaux ; ce nombre est accreu jusqu'a seize. Et en fin les navigateurs, auquels l'usage & les perils ont accomply l'industrie, en recognoissent trente-deux[...] », Pontus de Tyard, *Deux Discours*, 1578, éd. cit., f. 58 r°.

28 ペドロ・デ・メディッナ、『航海術』の中の「海図の風と風の名前と数について」(5章目)、Pedro de Medina, *L'Art de naviguer*, 1554, éd. cit., ff. 25 r°-27 v°.